

宇宙を湛える日本画

● 千住 博

日 本画で使用する絵具は「岩絵具」といい、天然の原石を細かく均一の粒子に加工したのですが、実はこの原石が世界中から集められているということは、意外に知られていないようです。たとえば、私がよく使う色「天然群青」の原石は、中国やオーストラリア、北米産の磁鉄鉱ですが、それぞれに輝きや深みが異なるため、空に使用する群青と、森の暗い部分に使用する群青とを、その透明感や明度で使い分けたりしています。岩絵具を動物の膠と混ぜ、水で薄めて画面に塗った技法のことを日本画というのですが、こうして考えてみると、日本画とは岩絵具を通した地球との触れ合いであることがわかってきます。

かつては天然の原石を砕いて身体に塗ったりすることでハワーを得たり、災いから逃れたりしていました。その化粧という行為を、人体にはではなく紙や板に施しているのが日本画です。化粧品をあらわす「コスメティックス」の語源が、宇宙を意味するコスモスであることを併せて考え

ると、日本画は神秘的なアニメイズムにも直結していることになりました。「画」の前に「日本」という国名がつく、地域的に限定された名前とは裏腹に、その成り立ちには底知れない拡がり秘めているのです。

正倉院御物の絵柄の中には、天平人でなく、西アジアの遊牧民の姿を見ることが出来ます。日本文化の内実とは、西から東への文化の伝播のプロセスであったことをここから教えられます。もともと日本文化は世界を立脚点としていたことになりましたが、日本画の画材にも同じことが言えるわけで、日本文化の隅々にまで世界が行き渡っているという、その壮大さには常に驚かされます。これは同時に、日本文化を構成する要素が日本に留まらず、世界の中にも存在することを意味します。日本には世界があり、世界には日本があるのです。

私のニューヨークのアトリエには世界中からアーティストが訪ねてきますが、皆、私の岩絵具に、一様に目を輝かせ、それぞれの国に持ち帰って、

自分の作品や手法に生かしたりしているようです。

私が日々、岩絵具を通して地球と触れ合いながら感じるインスピレーションやイマジネーションを、岩絵具技法が確立した二一世紀の画家たちも同じように感じていたに違いありません。国境や人種を超え、時を超え、日本画は岩絵具を通して「世界へ世界から」羽ばたいているのです。日本画の中には世界がある、そして宇宙がある、いつもそう感じています。



イラストレーション：栗岡奈美恵

せんじゅ ひろし / 1958年東京生まれ。東京芸術大学大学院博士課程修了。日本画の伝統的な技法のうえに立ち、現代的表現を追求する。第46回ヴェネチア・ビエンナーレ展で絵画部門優秀賞を受賞。ニューヨーク在住。